

第3回気象学史研究会「日本での初期の数値天気予報」を開催

気象学史研究連絡会

気象学史研究連絡会では第3回の気象学史研究会を2018年度春季大会にあわせ、5月16日(水)につくば国際会議場にて開催した(第1図)。約40名が参加し、学会外からも多くの参加があった。

今回は「日本での初期の数値天気予報」をテーマに、第二次世界大戦直後の米国で研究開発が進展し、1959年に気象庁現業にとりいれられた数値天気予報(以下「数値予報」)に関し、日本でどのような研究開発が進められてきたかを議論した。新田 尚氏の書面発表に引き続き二宮洸三氏と国立科学博物館の有賀暢迪氏に講演いただいた。コンピーナーと司会は研究連絡会世話人のひとり増田耕一(首都大学東京)が務めた。



第1図 第3回気象学史研究会(2018年5月16日(水)つくば国際会議場中会議室201)の様子。(a)講演後質問に答える二宮洸三氏。(b)講演する有賀暢迪氏。(c)コンピーナー・司会と新田氏報告の代読を務めた増田耕一気象学史研究連絡会世話人。(d)講演後の質疑応答も熱心に行われた。

20年余り数値予報の技術開発とその業務化に従事された新田氏は「日本での初期の数値予報」と題して、東京大学の正野重方教授のイニシアティブによる1953年の数値予報グループ(東大気象学研究室、気象研究所、気象庁予報部予報課などの有志)の結成が初期の数値予報研究とその実用化の推進力となったこと、数値予報現業業務化実現には、米国に留学して最新の研究動向に触れた岸保勘三郎を始めとする、気象研究所・気象庁予報課などから気象庁電子計算室に集まった多くのスタッフによる尽力があったことなどを報告した。

1970-80年代に数値予報業務に従事された二宮氏は「日本における初期の数値予報の発展とその問題点」と題して、数値予報以前の気象予測の歴史や数値予報の基本から説き起こし、日本における初期の数値予報の発展とその問題点を幅広い観点から論じた。数値予報の全体像は、情報の公開も不十分であり、今日に至っても社会的に正確に理解されておらず、重要性・有益性も十分に認知されず社会的な強い支持を得ていないことを指摘した。特に初期における中小規模現象の軽視、論文等報告が本来業務ではないという偏見に基づく研究開発成果公開の不十分さ、科学研究に本来求められる多様性を損なう「選択と集中」(政治的な過度の)などが問題点として特に強調された。

有賀氏は「電子計算機以前—日本における数値予報研究の始まり」と題して、計算科学の嚆矢であり、「理論と実験」ではなく「観測とシミュレーション」という形を中心的に取る気象学に、科学史の立場から注目し、文献資料を根拠とする歴史学研究の手法により、1950年代の日本での数値予報研究について報告した。1950年頃から『予報研究ノート』(『気象研究ノート』の前身)などに多くの報告がされ、米国の岸保勘三郎から多くの情報もたらされていたことなどを紹介した。『予報研究ノート』の全号が揃っている図書

館がほとんど無い（例えば気象庁図書館では一部の号は気象研究所蔵本の複製を所蔵）など、資料保全の困難さも指摘した。

質疑応答では大気力学の発展史としての数値予報の位置づけや、統計予報など他の予報技術の研究動向、データや資料の保存・保全などについて活発な意見交換が行われた。今日、気象学の発展のみならず、政治・社会的にもますます大きな影響力を持ち始めた気象の数値シミュレーションの今後の発展を考える上で、本研究会がすこしでも参考になったのであれば幸いである。

二宮氏にはすでに講演概要をまとめていただき、

「天気」10月号に掲載された。他の講演についても掲載に向けてご準備いただいている。

最後になるが、研究会に向けて貴重な資料をご用意いただいた新田氏、講演いただいた二宮氏・有賀氏、また開催にあたりご支援ご協力をいただいた講演企画委員会および大会実行委員会各位にこの場を借りてあらためて御礼申し上げる。

第4回の気象学史研究会は2018年度秋季大会（仙台市）にあわせて10月31日に「わが国における大気放射学の草創と東北大学」をテーマとして開催した。本研究会についても追って報告したい。